学習意欲減退要因と無動機に関する実証研究：自己決定理論に基づいて

西田 理恵子

1. はじめに

本稿では、Nishida and Takagi (2023) に出版を行った "Investigation of demotivational factors, motivation and amotivation for Japanese junior high school students in the Japanese EFL context" の再分析を行うことを目的としている。Nishida and Takagi (2023) では、自己決定理論に依拠した内発的動機づけ、外発的動機づけ (同一化調整、取入的調整、外的調整)、無動機、学習意欲減退要因 (興味関心の欠如、教材、教師の行動、失敗の経験)の全体の傾向を明らかにし、相関分析にて要因間の検討を行い、クラスター分析を用いて学習者の特徴を明らかにした。しかし、共分散構造分析を用いた学習意欲減退傾向と自己決定理論に依拠した内発的動機づけ、外発的動機づけ、無動機との関係については明らかにされていなかった。本稿では、共分散構造分析を用いて、再分析を行い、学習意欲減退要因と自己決定理論の関係性について明らかにすることを目的にしている。まず、学習意欲減退要因に関する先行研究を概観し、自己決定理論を概括する。

2. 先行研究

2.1 学習意欲減退要因

これまでの国内の学習意欲減退要因に関する研究は、主に、菊池 (2015)、Kikuchi (2009)、Kikuchi and Sakai (2009)、Sakai and Kikuchi (2009) がある。Kikuchi (2009)では、日本における高校英語学習環境での英語学習減退要因として、1) 教師、2) 文法訳読中心の授業、3) 大学入試、4) 単語学習、5) 教材を挙げている。この研究では、学習意欲減退要因は、文法訳読中心授業や大学入試が影響すると報告されており、また単語学習をし、記憶を行っていくことにも関係することが報告された。

Kikuchi and Sakai (2009)では、高校英語学習者を対象に因子分析を行った結果、1) 教材、2) 学校の設備、3) テスト、4) コミュニケーション中心でない授業、5) 教師の自信とティーチングスタイルに分類された。この中で最も低い数値を示したのは、学校の設備であったが、教材と教師要因については高い数値が示されたため、教材選定や教師の自信・ティーチングスタイルが英語学習環境に影響する可能性を示した。

また Kikuchi (2011) では、高校英語学習者を対象として学習意欲減退要因を 6 要因としてモデル化を行っている。それらの要因は、1) 教師の行動、2) 教室内の特性、3) 教室内環境、4) 教材、5) 失敗の経験、6) 興味の欠如であった。この中で、強い相関関係が見られたのは、興味関心の欠如と失敗の経験 (r = .58, p < .01)であり、教師の行動と失費の経験 (r=.47, p<.01)であった。共分散構造モデルでは、学習意欲減退要因から教室の環境へのパス係数が強く(.74)、学習意欲減退要因から興味の欠如へのパス係数も強かった (.69)。

2.1 自己決定理論

自己決定理論とは、Deci and Ryan (1985; 2002) が提唱した教育心理学的な理論であり、教育心理学のみならず、心理療法、スポーツ科学、社会科学、教育、言語学習、文化、COVID-19 など様々分野での応用がなされている。自己決定理論は、内発的動機づけ、外発的動機づけ、無動機の連続体で示されており、内発的動機づけは最も自己決定的であり、無動機は自己決定的な状況を示している。内発的動機づけは、八島 (2019) によれば「それをすること自体が目的で何かをすること、それをすること自体から喜びや満足感が得られるような行動に関連した動機」(p.91)である。外発的動機づけは、内発的動機づけに近い統合的調整、統一化調整 (活動などに対して価値を見出す)、取入的調整 (他者の承認に注目する)、外的調整 (報酬を目的にする) とあり、外的調整になると自己決定度が最も低い調整となる (西田, 2022, p.23)。無動機は自己決定度が最も低く、まったくやる気の状態を示す (西田, 2022,

p.23)。
Nishida and Takagi (2023)では、無動機と学意欲減退要因 (興味関心の欠如、教材、教師の行動、失敗の経験)の間に強い正の相関系を示した。また、学意欲減退要因の 4 つの要因であり、興味の欠如、教材、教師の行動、失敗の経験の間にも強い正の相関関係を示していた(表 2)。しかし、学習意欲減退要因が、どのように内発的動機づけ、外発的動機づけ、無動機に影響するのかについては明らかにしていない。

3. Research Questions

本稿では、Nishida and Takagi (2023)では明らかになっていなかった、学習意欲減退要因と自己決定論に依拠する要因の関係を明らかにすることを目的としている。従って本研究の RQ は以下の通りである。

RQ1. 内発的動機づけ、外発的動機づけ、無動機と学習意欲減退要因の要因間の検討を行う。

4. 研究方法

4.1 調査方法

2019 年の 2 学期に教室内で質問紙調査を実施している。Nishida and Takagi (2023)では、リッカート法 5 件法にて実施した質問紙調査の項目には、Hiromori (2006)から引用した内発的動機づけ(5 項目：α.94)、同一化調整 (5 項目：α.95)、取入的調整 (5 項目：α.73)、外的調整 (5 項目：α.66)、無動機 (2 項目：α.81)、Kikuchi (2011)、Serai (2018)から引用した興味関心の欠如 (5 項目：α.95)、教材 (3 項目: α. 84)、教師の行動 (3 項目：α. 91)、失敗の経験 (6 項目：α.94) であり、十分な信頼性係数が確保されていた。SPSS ver.28 を使用して統計分析を実施した。

4.2 調査対象者

調査対象者は 388 名の公立中学生であり、内訳は、1 年生 (122 名)、2 年生 (144 名)、3 年生 (122 名) であった。

4.3 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、調査対象校に研究計画書、質問紙、同意書を公立中学校側に提出した。提出するにあたり、公立中学校側の学校長、英語担当教員と面談を行っている。個人情報保護を保つため、個人に関する情報の一切を匿名とし、地域・個々の教師・生徒が特定されないように、質問紙調査を実施した。質問紙への個人名の記載はない。個人情報保護法の観点から名称を全て伏せ、守秘義務を守り、細心の注意を払ってデータ管理を行っている。調査の実施にあたっては、学校側から保護者に連絡を入れている。

5. 結果

本研究では、内発的動機づけ、外発的動機づけ、無動機と学習意欲減退要因の要因間の関係を用いて明らかにすることであるため、共分散構造分析を行っている。記述統計、相関分析は、Nishida and Takagi (2023)で行ったため、表 1、表 2 に示す。記述統計を見ると、全体傾向として最も高い数値は同一化調整であり ($M = 3.19$)、最も低い数値は教師の行動であった ($M = 2.06$)。相関係数を見ると、内発的動機づけと外発的動機づけは正の相関関係にあるのに対し、内発的動機づけは無動機と負の相関関係にあった。無動機は、外発的動機づけ（同一化調整、取入的調整、外的調整）と負の相関関係にあった。また無動機は学習意欲減退要因 (興味関心の欠如、教材、教師の行動、失敗の経験) と正の相関関係にあった (Nishida & Takagi, 2023)。

表 1. 記述統計 (Nishida & Takagi, 2023)

	内発的動機づけ	同一化調整	取入的調整	外的調整	無動機	興味関心の欠如	教材	教師の行動	失敗の経験
1年生	3.48	3.91	3.10	3.24	2.30	2.24	2.22	2.01	2.36
2年生	3.24	3.82	2.95	3.09	2.44	2.54	2.35	2.32	2.81
3年生	3.66	4.01	2.95	3.05	2.10	2.30	2.04	1.80	2.34
合計	3.45	3.91	3.00	3.12	2.29	2.37	2.21	2.06	2.52

表 2. 相関分析 (Nishida & Takagi, 2023)

	内発的動機づけ	同一化調整	取入的調整	外的調整	無動機	興味関心の欠如	教材	教師の行動
同一化調整	.74**							
取入的調整	.51**	.47**						
外的調整	.34**	.39**	.62**					
無動機	-.49**	-46**	-.09	-.06				
興味関心の欠如	-.52**	-.52**	-.26**	-.13*	.51**			
教材	-.44**	-.41**	-18**	-.13*	.49**	.65**		
教師の行動	-.43**	-.39**	-.13*	-.10*	.47**	.57**	.79**	
失敗の経験	-.43**	-.34**	-.17**	-.10*	.48**	.68**	.70**	.63*

** p<.01, * p<.05

本稿で示す研究課題 1 では、学習意欲減退要因 (興味関心の欠如、教材、教師の行動、失敗の経験) と自己決定理論に依拠した内発的動機づけ、外発的動機づけ、無動機の関係を明らかにすることにある。これまでの研究においては、学習意欲減退要因 (興味関心の欠如、教材、教師の行動、失敗の経験) がどのように内発的動機づけ、同一化調整、取入的調整、外的調整、無動機に関係するのかは明らかになっていない。従って、仮説モデルの生成を行い、学習意欲減退要因、内発的動機づけ、外発的動機づけ、無動機の関係性について、共分散構造分析を用いて実施した (図 1)。適合度指標には、In'nami and Koizumi (2013) が推奨するように CFI、SRMR、RMSEA を用いて算出を行った。適合度指標に示される適合度は、CFI .90 以上、SRMR ≦.08, RMSEA≦.06 であると示されている (Hu & Bentler, 1999)。

先行研究と理論に基づいて、仮説生成モデル (図 1) を作成した。次に、図 1.に基づいて共分散構造分析を行った(図 2)。共分散構造分析では、学習意欲減退要因がどのように無動機、外発的動機づけ、内発的動機づけに繋がるのかを分析している。結果として、学習意欲減退要因から最も強いパス係数を示したのは無動機であり (.63)、内発的動機づけへのパス係数は、-.59 であった。外的調整へのパス係数は -.15 であり、取入的調整へのパス係数は -.25 であり、同一視調整へのパス係数は -.54 であった。適合度は、CFI = .976、SRMR ＝ .0413、RMSEA ＝ .082 であった。

図 1. Hypothesized Model to be tested.

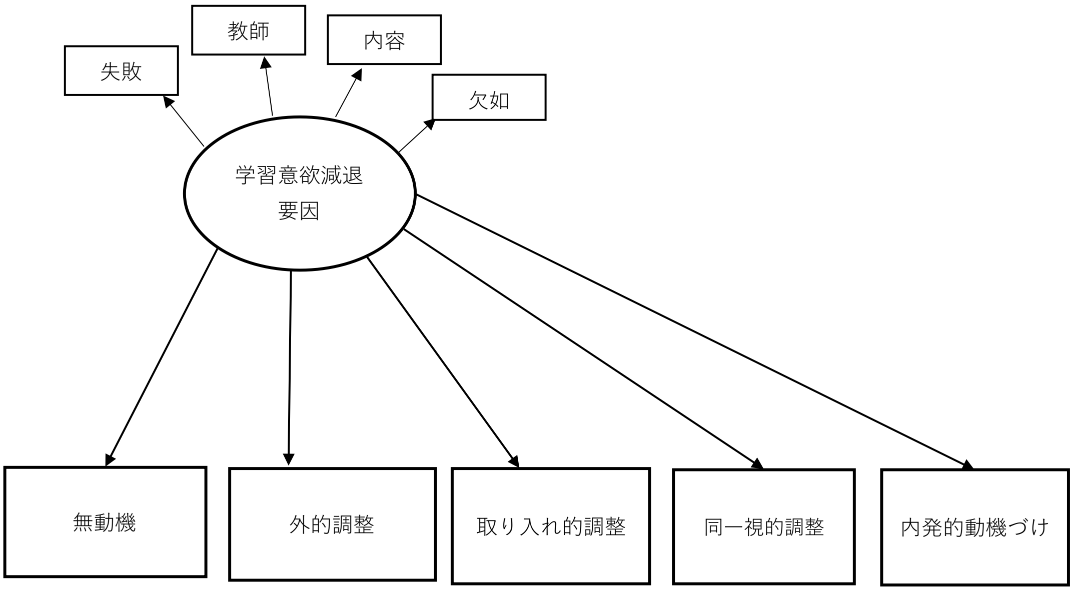
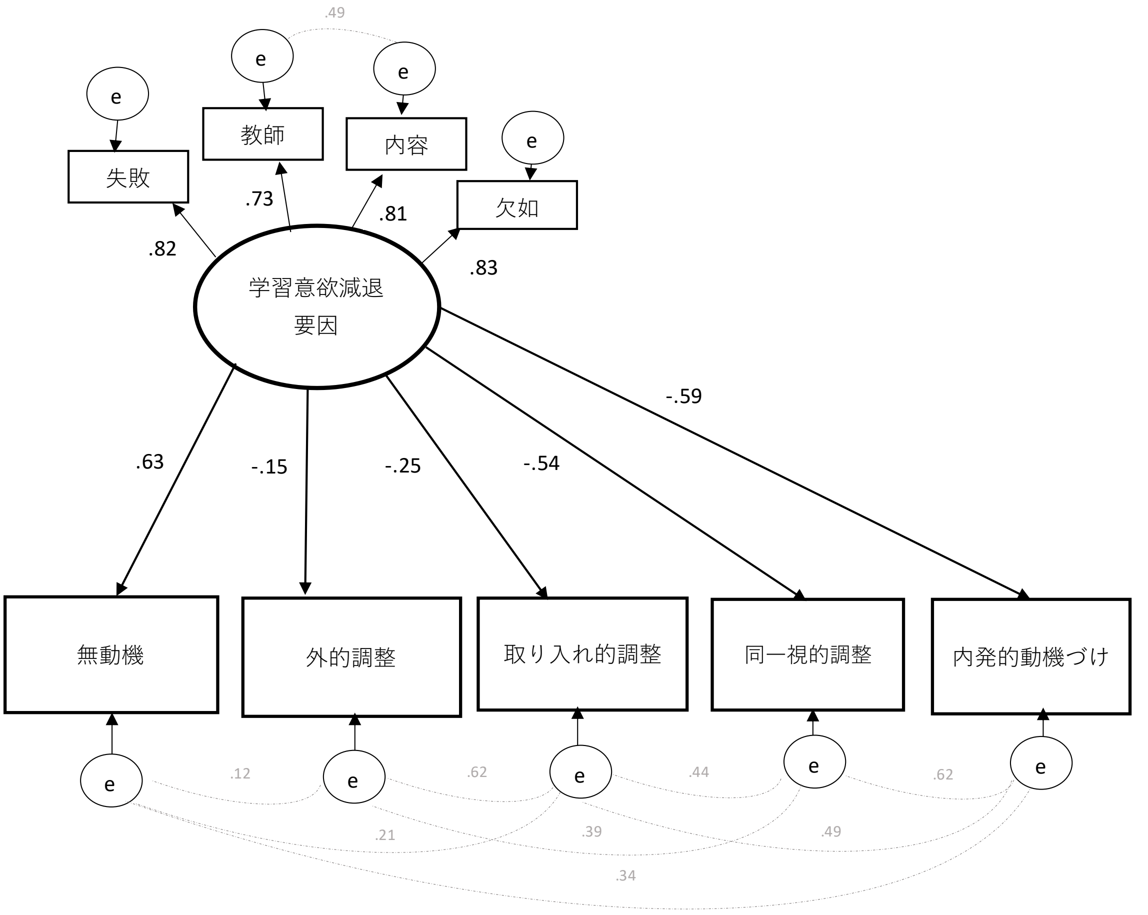


図 2. 学習意欲減退要因と自己決定理論のモデル



Fit Index： $\chi^2 = 64.951$, $df = 18$, $p = .001$, CFI = .976, SRMR = .0413, RMSEA = 0.082

6. 考察

本研究では、Nishida and Takagi (2023)では明らかになっていなかった学習意欲減退要因と内発的動機付け、外発的動機づけ (同一視調整、取入的調整、外的調整)、無動機の要因間の検討を行うために、共分散構造分析を用いて分析した。結果として、学習意欲減退要因へと繋がったもっと強いパス係数は、無動機であった。学習意欲減退要因を強く感じている学習者は無動機に繋がることを示唆した。従って、英語学習に対して無動機な状況にならないためにも、教育現場においては、学習意欲減退要因が低下するように教育的な配慮をしていく必要がある。その一方で、学習意欲減退要因を強く持つ学習者は、内発的動機づけへは負のパス係数が見られた。同時に、外的調整、取入的調整、同一視的調整については、内発的動機づけに近い同一視的調整は強い負のパス係数がみられた。この結果から、学習意欲減退要因が無動機に繋がる可能性を示唆したため、学習意欲減退要因を未然に防ぐことができるような教育的配慮が必要となると考えられる。特に興味関心の欠如へのパス係数が強いため (.83)、中学生が興味関心を持てるような学習内容やタスク、活動を提示することが望ましい。また失敗の経験へのパス係数も強いことから (.82)、失敗を克服できるような課題などを行い、中学生が英語学習に自信が持てるような配慮が必要となろう。

7. おわりに

本稿では、Nishida and Takagi (2023)で明らかになってなかった内発的動機づけ、外発的動機づけ、無動機、学習意欲減退要因との要因間の検討について、共分散構造分析を用いて行った。結果として、学習意欲減退要因を強く感じる中学生は無動機へと繋がる可能性があることから、教育現場においては学習者が無動機な状態になってしまうことのないように、学習意欲減退要因を未然に防ぐ必要があろう。本稿では、これまでに明らかになっていなかった学習意欲減退要因と無動機、外発的動機づけ、内発的動機づけとの関係性を明らかにしたため、当該研究分野にとっての一助となることを望んでいる。

謝辞：本調査を行うにあたり、公立中学校の校長先生、先生方、中学生のみなさんには大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

8. 参考文献

西田理恵子 (2022). 動機づけ研究に基づく英語指導. 大修館書店.

八島智子 (2009). 外国語学習とコミュニケーションの心理. 関西大学出版.

Hiromori, T. (2006). The effects of educational intervention on L2 learners' motivational development, *JACET Bulletin, 43*, 1-14.

Hu, L., & Bentler, P.M. (1999). Cutoff criteria for fit indexes in covariance structure analysis: conventional criteria versus new alternatives. *Structural Equation Modeling, 6,* 1-55. https://doi.org/10.1080/10705519909540118

In'nami, Y., & Koizumi, R. (2013). Structural equation modeling: in language testing research: A review. *Language Assessment Quarterly, 8,* 250-176. https://doi.org/10.1080/15434303.2011.582203

Kikuchi, K. (2009). Listening to our learners' voices: what demotivates Japanese high school students? *Language Teaching Research 13 (4),* 453-471. https://doi.org/10.1177/1362168809341520

Kikuchi, K. (2011). Learners' perceptions of demotivators in Japanese high school English classrooms. [Unpublished doctoral dissertation]. Temple University.

Kikuchi, K., & Sakai, H. (2009). Japanese learners' demotivation to study English: A survey study. *JALT Journal, 31* (2), 183-204.

Nishida, R., & Takagi, T. (2023). Investigation of demotivational factors, motivation and amotivation for Japanese junior high school students in the Japanese EFL context. *LET Kansai Chapter Collected Papers, 21*, 1-17. https://doi.org/10.50924/letkansai.21.0_1

Serai, K. (2018). An empirical research on demotivating and motivating factors of English learning among Japanese university students. [Unpublished master's thesis]. Osaka University.